



第8巻第5号
通巻第89号

本紙がズバリ予想する FIFAワールドカップ2006決勝戦

ブラジル対スウェーデンは2対2のまま 両者譲らず延長戦に突入。延長前半12分、ブラジルのクリア・ミスにすばやく反応したイブラヒモヴィッチの右足がこの熱い一ヶ月に終止符を打った。

発行所 東京都杉並区成田東4丁目3番44号 〒166-0015からす新聞本社

からすホームページ <http://www.go-karasu.com/> 投書・お問い合わせのE-mail : colors@go-karasu.com

ワールドカップが近づいてきた。このためだけに生きている、などというほどの強烈なファンではないけれど、全試合見ずにはいられないし、そのためには、ありえないようなスケジュール調整も厭われない。ライヴの後の打ち上げも拒否。仕事も締め切りがタイトなものは引き受けない。傍から見れば、ただの我儘、ただの愚か者でしかない程度には熱狂的な我輩である。

親戚のあんちゃんに引つ張られ、サッカーの世界に嵌め込まれてしまったのは二年生の時。四十年近く昔だということになる。飽きっぽい私にしては、凄じいことだ。周囲の人間にも私のサッカー好きは知れ渡っている。そして、日本は予選突破できずかねえ、というような話題になることが頻々と。冷静に考えれば、その可能性は相当に低い。その旨を伝えると、あれ、変な人だな、というような顔をする人も中にはいる。実際問題、日本が予選を突破するほどに強くなってくれたら、それは結構なことであるけれど、サッカーに関しては未だ未だ未だ後進国なのであるからして、過剰な期待を持つべきではないし、ちよいとプロ・リーグができたらからといって、いきなりヨーロッパや南米のチームでもない連中と対等に戦えるようになる筈などあるわけがない。サッカーはそんなに甘くない。

今日の紙面から

- 二面からすライブラリー
- 映画『デス・ノート』(前編)
- 本『ブルックリン・フォーリーズ』
- 三面(ロンドンレポート)
- 愛するガラクタ



ない。本大会に出場できるだけで十分に幸せ。こんなところが掛け値のない素朴な心境。しかし、ね、などと受け取られてしまつかもな、と幾分かの懸念。そう思わざるをえぬほど、巷は狂信的な待ジャパン信者で溢れ返っているように見える。ワイドショーを始めとする諸々のメディアを御覧あれ。放送局の狂騒曲。自分より酔っぱらっている人を目にするのと酔いが醒めるのと同じような効果なのか、テレビの騒ぎを見ると、どうにも冷めますね。腰が引け、斜に構えなくなる。元来、天の邪鬼だしな。

そんな私ではあるけれど、勿論、選手たちには持てる力を出しきって欲しいと思う。ただ、それは他の国の選手に関しても同じなのである。要は、素晴らしい試合、素晴らしいプレーが見たいだけ。私がワールド・カップに望むのは、言ってみれば、それだけのこと。日本代表を盲目的に応援する気になれないのは、そんなところに原因がある。より良い試合、より凄いプレーをする者たちを見たいし、応援したい。これって、愛国心の欠如なのかな。

(最終面に続く)

からす新聞は×××××
が母体となって、世界に文化と芸術を発信すべく発行
しています。
誰でも自由に参加できま
す(無茶じゃない範囲で)。



Films

デスノート・前編 (Death Note)

2006年公開(日本)

監督:金子修介

原作:大場つぐみ・小畑健(作画)

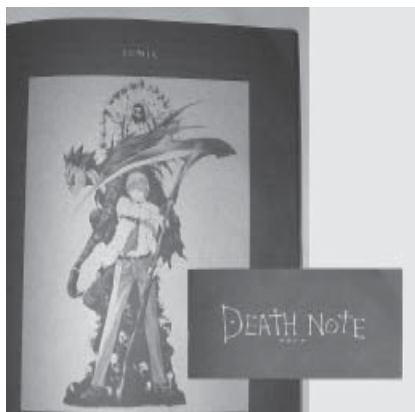
出演:藤原竜也、松山ケンイチ、香椎由宇、鹿賀丈史、リュック・リョク

主題歌: Dani California (RED HOT CHILI PEPPERS)

配給:ワーナー・ブラザーズ映画

「The human whose name is written in this note shall die.」

(このノートに名前を書かれた人間は死ぬ。)



日本語でしかオースターを読んだことがないという人には、どうせなら原書で読んでもらいたい。せめて、眺めるだけでも。前にも書いたような気がするが、あなたが知っている日本語になったオースターとは手触りの異なるオリジナルなオースターの世界があるんだ。そして、それは想像以上に、嗚呼、何とも人間的。

(全十)

人生の末期を過ごそうと、ブルックリンにやってきたネイサン翁。その周辺に、どこにでもいそうなのに、それでいて、そんなやつおらへんやろあ、というような人々がうろろする。例によって例の如きオースター節。おかしくもあり、哀しくもあり。
あれこれと一方ならぬ出来事に見舞われて、あたふたしながらも解決できることは解決し、解決できないことは解決できず。その恰好良くないところまで恰好良いじゃねえか、この野郎。粹なじしいがいたもんだ。
出口が温いなあ、という気がするものの、後味も良好。やっぱりいかすぜ、オースター。

二〇〇三年一月集英社、週刊少年ジャンプで連載が始り単行本の売り上げを累計で一四〇〇万部にまで伸ばしてしるヒットコミックの映画化。漫画の実写映画化というのは数多くあるが、実際観ても良いと思う作品は非常に少ない。元来漫画というのは映像よりさらに非現実的なストーリーを提供してくれるもの。それには奇抜なアイデアは欠かせない。そういう意味でこの話は完全にアイディア、または企画とも言えるものの勝利だろう。

い一分の隙も無く完成させている洋画に任せる事にして、ある新人漫画家が思いついたアイディアや登場人物を楽しんでみるのも一興だろう。また、主演の藤原は、ビジュアルこそアイドル系だが、なかなかどうして、十分に演技派と言える。それもそのはず、彼は一五歳の時、演劇オーディションに合格してプロに入り、ロンドンで初舞台を踏んでおり、数々の演劇賞をも受賞している。さらに見所として、死神の「死神」。完全にCGで再現されており、この映画の重要な引き締め役になっている。邦画では珍しい優秀なキャラクターと言えるだろう。エンドロールに声を吹き替えた役者名が記されるので確認してみよう。
最後に、あのレッチリがタイアップ曲を提供した事を添えておく。彼らにとっては映画にタイアップ曲を提供するのは初。

(小張寅僧)

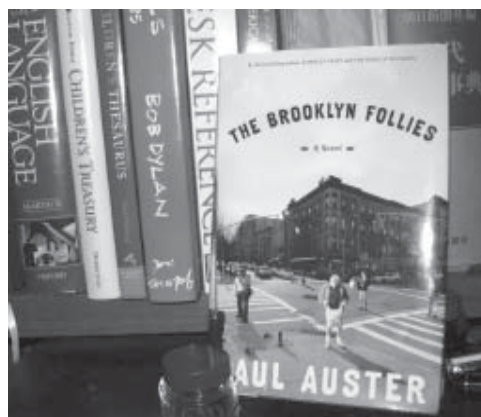


Books

the Brooklyn Follies

Paul Auster

Henry Holt、2006年 ISBN0-8050-7714-6



愛するガラクタ

先日、人からもらった風水の本を読んだ。でもイギリス人のおばちゃん書いた物の和訳で、それは簡単に要約すれば「ガラクタを捨ててさっぱりしよう」といった感じの内容。なんでも、生活の中で一番リラックスしたり、休んだりする場所であるはずの居住空間が、散らかっていたり、汚かったりすると悪いエネルギーが溜まり、よくないらしい。確かに、言われて見れば身体的にも精神的にもよくない気がする。どんなに汚く散らかっていても、住み慣れた場所は落ち着くという意見もあるけれど、やっぱり自分の住居が綺麗であれば、単純に気分はいいものだ。

読み進めて行くと、さらに長い間使わないうものや、壊れているもの、はたまた好きでないものなどが沢山あるのもよくないらしい。例えば、色が好きじゃなくて全く使っていないお皿が、もらい物だし捨てるのももったいないので何年も食器棚の中にあるとか、いつか直そうと思ってそのままの壊れたミシンが何十年も物置の中にあるだとか、また必ず見たくなると思って録画したビデオが何十本も棚にずらりと並んでいるだとか、そんな物達。大抵の場合が、何年も手を触れない、はたまた思い出しもしないことが多い。

それらは、所有物なので自分と何かしらのエネルギーで繋がっているのだそう。いつか必要になるからとか、「その内着るかもしれないから」とか「誰かが使うかもしれない」とかそう言った「捨てられない」の思いは決してプラスではなく、そんなものがドンドンと溢れ自分の居場所を占領してしまつと、新しいエネルギーが入る場所がなくなり身動きがとれなくなってしまう、と言う解説。

要するに、「いつか...」とか「その内」とか「...しれない」なんて思いに部屋が溢れかえってしまう、ってな事だろうか。

ぐざり。

確かに、ウンウンとうなずいてしまつた。もったいない。といった考え方もあるけれど、ここでは物を粗末にしろと言つたのではなく、「必要のないものがあなたの生活には多すぎませんか？」という事。当然のごとく、その本を読みながら今の自分の部屋を思い浮かべてみた... すみません。凄く散らかってます。いや、と言うよりも収納場所が無いのだ。もともと狭い部屋が、窮屈に物で溢れかえっている。

London Report

ロンドンに初めてきた時の荷物は小さなスーツケース一つ。半年ぐらいはそのまま、そのスーツケースに収まる範囲の物だけで生活していた。それが、こちらに来てから五年。よくもここまで物が増えたもんだと感心してしまふ。それらは、ガラクタでもあるしここの僕の生活の記録でもある様な気がする。一つ物が増える度にまた一つ、ここに腰を落着けていくような感じ。そう考えて見ると、今、僕の部屋がもの一杯になり身動きが取りづらくなつて来ているのは、英語だつたり何か他の事を得る為に来たこの国を、一度離れる時期が来ているのかもしれない。ふと、そんな事を思った。

僕の愛すべきガラクタ達はダンボールに詰め込まれたら、過去になるのだろうか、それとも前へと進むのだろうか？ 部屋を片づけて荷物を段ボール箱に詰めると言う作業は何かのプロセスなのかもしれない。何処か遠くへ行くのには時間をかけなければいけないのと同じように。何にせよ残りあと僅か。そろそろ部屋の片づけを始めよう。大掃除をしたら、どんな発見があるのだろうか。もしかしたらこの五年間が僕にとつてどんなものだったのか、少し分かるかもしれない。(神山)

ブロンドで青い目以外要注意

If you're not blond-haired or blue-eyed,
You may not leave with your life.

いよいよワールドカップ。開催地がヨーロッパに戻り、フランスのときみたいなフリーガン騒ぎがあちこちで起るのかどうか。98年には山高帽で乗り込んで来る本場イングリッシュ・フリーガンたちに一泡吹かせてやるかと、世界各国のならず者たちが終結する、という構図があった。実際小競り合いも起きた。今回も同じだろうか。注目の試合を探してみた。

ドイツ当局がもつとも警戒しているのが、国境を接するポーランドのフリーガン。警備の最高責任者シヨイブレ内務大臣も名指しで警告。5月13日には国内リーグで優勝を決めたレギア・ワルシャワのファンが、首都ワルシャワの旧市街で店舗を壊すなどして暴れ、二〇〇人以上が警察に拘束されている。国際的には無名ながら、チーム間の国内抗争は一時休戦にして虎視眈々とデビューの時を狙っているらしい。うまいことにグループリーグでポーランドはドイツと対戦する。14日、場所は日本。ブラジル戦も行われる西部のドルトムント。ポーランド国境に近いベルリンでないのは残念だがまあいい、ヒトラーにはやられたが、待つてよ、ポリッシュ魂見せてやる。

失業率を保ち、ネオナチの温床となつてきている。

これまでドイツで多く標的になつてきたのは移民数最大のトルコ人だが、今回は出場していない。代わりになりそうなのは、イランかサウジアラビアか。とすれば、21日、旧東独ライプチヒで行われるイラン。アンゴラ戦は危険度高くはないか。それがまたそう単純でもない。イランにはイスラエルに死を、ホロコーストなどなかったと公言する大統領がいたのであつた。ワシントン・ポスト紙によると、ネオナチ団体が、当日試合前にイラン大統領を支持する集会を行う計画があるという。ということ。危ないのは黒人だけか。実際、アフリカ各国がドイツで作る組織「アフリカ協議会(Africa Council)」は、行ってはいけないエリアを指定して注意を呼びかけている。でもなあ、まずはアンゴラの黒人応援団を血祭りに上げてるうちに、ええい面倒だ、イラン人もやっちゃえ、つてなことにもなりかねないか。

ライプチヒではフランス。韓国戦もある。日本人はヒトラー以来のよしみもあるし、ドイツ人の仕事取つたりしてないからやられることはないだろうけど、韓国人はそうでもないかもしれない。韓国の通信社、聯合ニュースによると、ライプチヒに近いマクデブルクで22日、韓国人学生が電車内に持ち込んだ自転車を押して地元ドイツ青年と殴り合いになり、青年は、外国人への嫌悪を表わす侮辱的な発言をし、韓国学生が電車から降りると追い掛けて暴行したのだそう。しかし、断言するが、連中に日本人と韓国人の見分けなど絶対につかない。(望月)

と問われたら、すつきりとは答えにくい。もの本に当たると、領土、主権、人民云々なんぞと書かれていて、わかったようにならないよな……ううん、やっぱりよくはわからない。けれども、何となくはわかっているというの、また事実である。まあ、世の中、そんなことばかりなのであるけれど。そんな模倣とした愛と国が結びついた「愛国」というもの。むにゃむにゃのむにゃむにゃむにゃ。

ああ、ううん、何となくはわかるものの、説明のしようがない。

日本にはたくさんさんの素晴らしいところがある。その一方で、この国には嫌なところもたくさんある。そんなあれこれ心の中に思い浮かべ、足し算引き算してみたりした結果、この国に……感覚的には、この町に……生まれて良かったなあ、と素直に思う。

(一面から続く)



万年筆なら dani

<http://danijapan.com/>

bar&kitchen kanna

営業時間
平日・土曜日 11:30~15:00 / 17:30~25:00
日曜日 17:30~25:00

定休日
毎週火曜日 & 毎月第3日曜日

中野区新井1-30-6
第1三宮ビル1F
Tel : 03-5343-1316

bar&kitchen kanna

お一人でも気軽に楽しめる、食事もできるShotBarです。ビール、パーボン、焼酎からカクテルまで、豊富なお酒と、季節の素材を取り入れた手作りのオリジナル料理を、4/500円~と手頃な料金でご提供いたします。

木とテラコッタを基調にしたギャラリー風の店内は舞台スタッフの手作り。ぬくもりの中に遊び心が溢れ、くつろげます。作品の展示、音楽、演劇等のイベントも企画スペースの提供も行っておりますので、興味のある方はご相談ください。各種パーティー、打ち上げにも最適です。

私は日本人である。日本人以外になろうと思っても、あれこれの規則があつて、なかなか難しい。外国の人が日本人になろうとするのも同様困難だろう。国というものは、そうそう自由には選択できないもののひとつである。だから、漠然とはいえ、自分の国をそれなりに好きでいられる私は運が良い。中には嫌いでしかたがないのに、日本人でいるしかない、というような立場の人だっているのだから。

その証拠という訳ではないけれど、例えば、ここ数年自殺者は三万人以上にも及び、出生率はほとんど下がつている、という現実がある。思い切り乱暴に纏めれば、この国では、どうにもこうにも生きていく気がしないという人が増え、子どもを生み育てたくはないという人が増えているというところだろう。そんな人たちに向かって、おまえら、国を愛せよ、と声をかけられるか。私にはできない。愛する気持ちというのは、人に言われて、はい、そうですか、そうです、などという風に動かせるものではない。国を愛する気持ち

を人に求めるのではなく、愛される国を育てる。そうでなくてはならない。

大のおとなが広場に二十二人も集まって、わいわいがやがやと玉ころを追いかけ回す。その姿を数万人で取り囲んで大騒ぎ。電波経由で世界の隅々まで、その姿が届けられ、勝った負けたと熱烈狂躁。テレビ中継は二〇ヶ国に及び、視聴者数は延べ三〇〇〇億人を楽々と超えるそうである。テレビの前にいる人々に、あなたは自分の国を好きですか、と尋ねたら、一体、どれほどの人が自信を持って手を挙げられるだろうか。ううむ。想像がつかない。けれども、あなたはサッカーが好きですか、という質問になら、世界中のあちこちで、勢いよく数えきれぬ手が挙がることは確かだ。肌の色や、思想や、信教、国境なんぞを軽々と超えて、ボールは転がる。つくづくサッカーって凄いよなあ。

(全文)



Ken-ichi Shinozaki,
architect

Voice : +81-3-3220-0644
Facsimile : +81-3-3220-0640;
e-mail: geta-s@t3.rim.or.jp
篠崎健一アトリエ

編集後記
からす新聞第八巻五号(通巻第八九号)、無事、発行できました。新聞に限らず、これからも新企画目白押しなので、みなさんの御協力をお願いいたします。御意見・御要望をぜひお寄せ下さい。次号発行予定日は二〇〇六年六月二十五日です。編集協力者、特派員記者、及び、投稿を熱烈にお待ちしております。

1クラス4人までの少人数制学習塾

3771

中野区本町2-50-12 ドエル中野201号
03-3379-1451

宝仙寺
ファミマ
おうめいどう
中野坂上駅